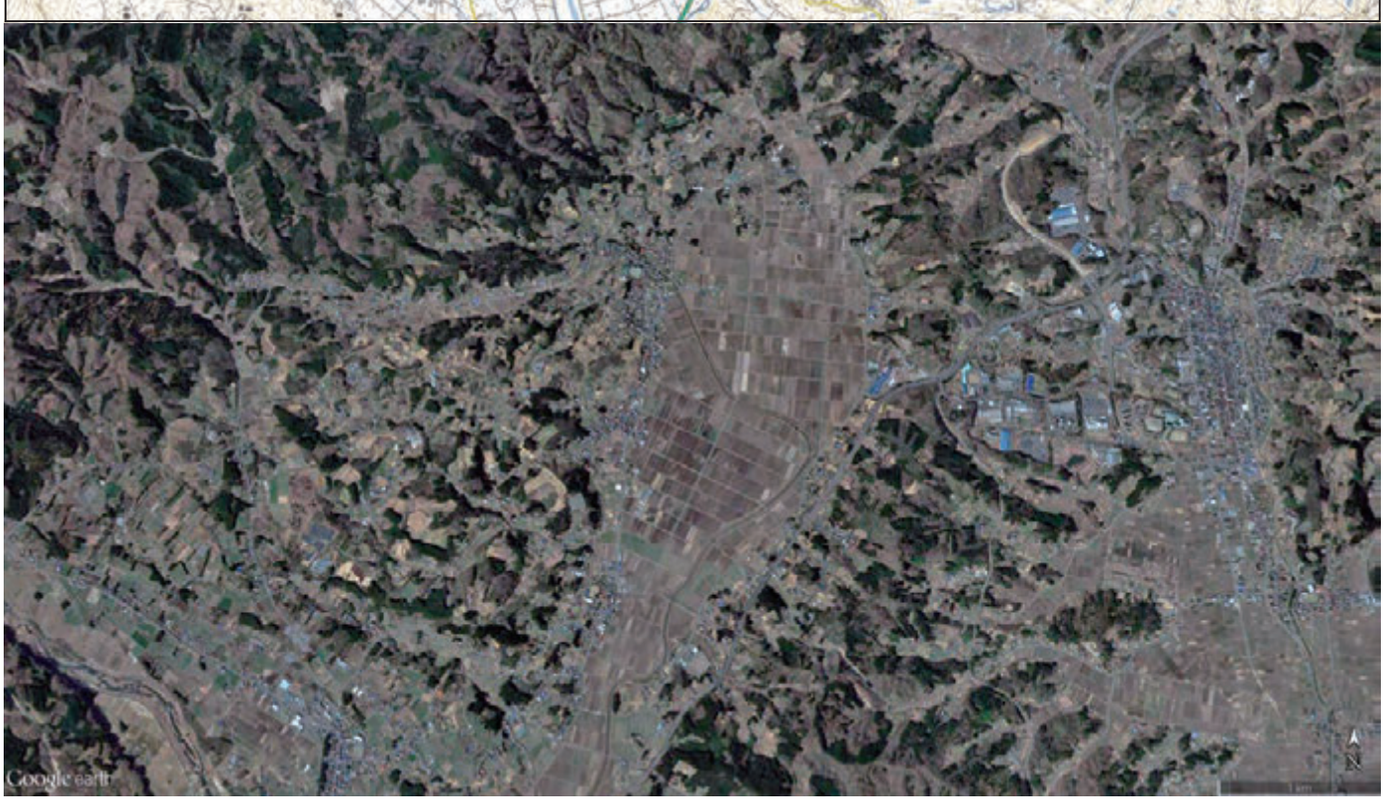
5．円田盆地ジオサイト



円田盆地からの眺望
（蔵王連峰と青麻山、山麓の丘陵地帯を一望する）

円田盆地を流れる雁柄川
（かつては谷地が入り組む複雑な地形を蛇行して流れた）

塩沢大山果樹園団地
（なだらかな丘陵地の地形を活かして大規模に造成された）

塩沢大露頭
（新第三紀の水成堆積物や火砕流の地層が見られる）

小山田峠付近の小露頭
（蔵王火山の約 3 万年前の噴火による噴出物が見られる）

湯口清水
（寛永の大噴火の時に温泉が清水に変わったと伝わる）

水神社（湯口清水）
（清水によって旱魃から救われた土地の人々が建立した）

平沢弥陀の杉
（平安時代に阿弥陀堂の杉並木として植えられたと伝わる）

平沢弥陀の杉
（樹高約 45m、幹周り約 9.7m の大杉を大人 7 人で囲む）

鎌倉沢（鎌倉温泉）
（蔵王火山形成以前の新第三紀の地層が見られ化石も産出）

鎌倉沢甌穴群（ポットホール）
（硬い岩盤と川の浸食作用が造り出した美しい造形）

円田珪藻土採掘跡
（一帯が広大な湖だった新第三紀の堆積物を採掘して利用）

平沢新町の町並み
（用水を各家に引き入れて洗い場として利用している）

兵糧館跡からの眺望
（鎌倉沢に面した中世の山城跡から円田盆地を一望する）

奥平家住宅
（小高い丘の上から盆地を見渡す江戸時代後期の肝入屋敷）

ジオサイトカルテ

サイト番号⑤

名称	円田盆地ジオサイト
テーマ	埋もれた湖の謎 ―蔵王火山前史を紐解く―
ジオサイトの概要・説明	蔵王火山とその東麓に広がる広大な丘陵に抱かれた円田盆地ジオサイトは、地形を活かした稲作が古くから根付いてきたエリアである。円田盆地は蔵王火山ができる以前に一帯に広がっていた広大な湖の痕跡である。湖底に堆積した地層のひとつである「円田珪藻土」は七輪などの材料として昭和30年代まで盛んに採掘され、地域の経済を支えた。また、盆地では弥生時代以降の遺跡が数多く発掘され、稲作に適した盆地の地形が早くから利用されてきたことが分かる。かつて温泉が湧き出ていたという湯口清水は、蔵王火山の寛永の大噴火の時に冷泉に変わったという記録が残り、以後この地での稲作を支えている。山麓の暮らしも火山とつながりを持ち、その恵みを受けていることを知らせてくれる逸話である。 蔵王火山ができる以前の大地の営みを知らせてくれる円田盆地と、そこを舞台として息づいてきた歴史ある山麓の人びとの暮らしの営みを知り、果樹園や直売所、清水では食の恵みにも触れてみたい。

ジオポイント

	名称	概要	分類
1	円田盆地	蔵王火山、青麻山とその裾野に広がる広大な丘陵を背景に、盆地には水田地帯が広がる。盆地で発掘された数多くの遺跡が、古くからの稲作を裏付けている。	B・E・I
2	塩沢大山果樹園団地	円田盆地と青麻山、蔵王火山を一望し蔵王ジオパークの全体像が分かる展望地。大露頭に見えるのは蔵王火山ができる以前、一帯が湖だった時代の地層。	B・E・I
3	湯口清水 (水神社)	蔵王火山の寛永の大噴火の時に温泉が冷泉に変わったという記録が残る。付近の地名は「湯口」。今もこんこんと湧き出す清水は地域の水源となっている。	A・D
4	平沢弥陀の杉(だるま杉)	樹高約45mの巨杉で、平安時代に建てられた阿弥陀堂の参道杉並木の名残と伝わる。約9.7mの幹周りは、両手を伸ばした大人7人でやっと一周できる。	H・J
5	一本杉の湧水	天正8年(1580年)に開山した清立坊の参道杉並木の名残と伝わる一本杉の付近から、近年の道路工事の際に湧き出した清水。	D
6	鎌倉温泉* (鎌倉沢)	平安時代末期の奥州合戦にまつわる伝説が残る秘湯。鎌倉沢には蔵王火山が出来る以前の地層が見られ、二枚貝やサメの歯の化石が見つかっている。	B・D
7	円田珪藻土採掘跡*	蔵王火山ができる以前、円田盆地や青麻山の一帯は広大な湖だった。珪藻土は当時の湖底の堆積物で、かつて七輪などの材料として盛んに採掘された。	B・D
8	向山不動尊の湧水*	丘陵麓から湧き出す清水。近年は湧出量が減少している。円田盆地の周囲を囲む丘陵は、一帯が湖だった時代の地層が隆起したものである。	D
9	大鳥神社*	蔵王参詣道筋の「三の鳥居」があったと伝わる場所で、「大鳥」の地名は「大鳥居」を連想させる。近くに大鳥神社が祀られ、蔵王権現石像が安置されている。	G
10	白山神社の杉並木*	北境村の領主・秋保家が大阪夏の陣凱旋の際に奉納した杉の名残と伝わる。小高い丘の上にある境内からは円田盆地を一望することができる。	H・J
11	平沢要害と新町*	江戸時代の平沢領主・高野家の居館だった平沢要害と、家臣の屋敷が連なる新町。屋敷の地割が今もそのまま残り、往時の景観を偲ばせている。	D・H
12	円田盆地の遺跡群*	円田盆地では弥生時代から近世までの数多くの遺跡が発掘されている。稲作の開始とともに、生活の場は河岸段丘や丘陵上から盆地周辺に移動した。	E・H
13	ひがしね古墳の森*	円田盆地東側の丘陵上には多くの古墳が造られた。地区住民によって散策路が整備され、古墳のある丘陵上からは円田盆地と蔵王火山を一望できる。	H
14	兵糧館跡* (兵衛館跡)	円田盆地の最奥部にある中世の山城跡で、円田盆地が一望できる。土塁や空堀跡が明瞭に残る。北面は断崖で、鎌倉沢が丘陵地を開析する様子が見られる。	H・I
15	十郎田遺跡*	鎌倉時代の武士の屋敷跡の一角から、大量の木器が出土。遠刈田に木地師の集落ができる以前から、蔵王山麓は木地師が活躍する土地だった。	H
16	奥平家住宅*	小村崎村の肝入を務めた奥平家の住宅で、江戸時代後期の文化6年(1809年)に建てられた。盆地北部の低い丘の上にあり、盆地全体を見渡すことができる。	H
17			
18			
19			
20			
21			
22			

＊:調査予定地

円田盆地ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：⑤－１

名　　称	円田盆地	所　在　地	蔵王町大字円田・塩沢・平沢・小村崎
管　理　者	－	管理者連絡先	－
テ　ー　マ	【円田盆地ジオサイト】埋もれた湖の謎―蔵王火山前史を紐解く― Ｂ．蔵王火山の活動前史／Ｅ．大地の恵みⅡ―地形と土壌―／Ｉ．景勝地		
サイトの説明	円田盆地は蔵王山麓の東にある小さな盆地である。新第三紀中新世（500万年前以前）の火山活動で形成されたカルデラ地形と考えられており、「古円田湖」と呼ばれるカルデラ湖を、その後の地層（火砕流、珪藻土等）が埋めて、現在の盆地状の地形が形成された。「古円田湖」の時代に堆積した珪藻土は七輪などの材料として利用価値が高く、明治～昭和30年代まで地域の産業として採掘された歴史がある。 盆地内には氾濫を引き起こすような大きな河川はなく、周囲の山麓からいくつもの小さな川が流れ込む。盆地内には弥生時代以降の遺跡が多く発見されており、縦横に流れる小河川によって潤された盆地の底面が古くから米づくりに適していたことが分かる。 円田盆地で多く発見される弥生土器は、赤彩され特徴的な文様を描くので考古学者によって「円田式土器」と命名された（西浦周辺で発見された円田式土器の長頸壺が東北大学に所蔵されている）。弥生時代以降も各時代の集落跡などが発見されており、現在に至るまで脈々と米づくりが続けられてきたことが分かる。 円田盆地から西を眺めると、蔵王火山とその山麓に広がる広大な森林や丘陵、盆地を一望にできる。ここに蔵王山麓の人々の暮らしがある。		
ジオ要素	・蔵王火山や青麻火山形成前の大地の成り立ちを理解するのに適している。特に、カルデラ湖の形成からその後の火山活動や湖の堆積物など、蔵王火山が形成される土台となった当時の周辺環境を理解しやすい。 ・氾濫を引き起こすような大きな河川はなく、山麓からいくつもの小さな川が流れ込むため、潤された盆地は古くから米づくりに適していた。盆地内の遺跡からは稲作を行なっていた弥生時代以降の土器が多く出土する（水はけの良い河岸段丘面上には縄文時代の遺跡が多く、弥生時代の遺跡は少ない。稲作の開始によって人々の生活の場が変化した）。 ・珪藻土を資源として活用してきた地域の歴史を学ぶことができる。		
話すポイント	◆地形 高速道路を利用して村田ICから訪れる場合、蔵王ジオパークへの入口となるので、蔵王・青麻両火山と円田盆地を一望しながら、蔵王ジオパークの概要や全体説明を行なう。 特に、カルデラ湖の形成からその後の火山活動や湖の堆積物等、蔵王火山が形成される土台となった当時の周辺環境について解説する。 造成前の古い地形図や航空写真などを用い、藪川など多くの小河川が盆地に流れ込み、細かく分かれた谷が当時の稲作に適していたことを説明。 ◆歴史 稲作の歴史が弥生時代までさかのぼり、昔から氾濫が少なく耕作に適した環境であったこと（恵み）、稲作開始以前の縄文時代の遺跡の分布との違いについて説明。 珪藻土の採掘にも触れ、資源として活用してきた地域の歴史を説明する。		
注意すべき点	・駐車スペースもなく、歩道もないので大勢での見学は難しい。 ・遺跡を直接見ることはできないため、広域的な地形の広がりも含め説明資料が必要。		
施設、案内板等の整備状況	・道路脇の盛土の上から展望でき、円田水田（みやぎ蔵王三十六景）の看板がある。 ・付近に駐車スペースはない。		
疑　問　点			
提　　案	・円田盆地の形成史の詳細について、学術的な整理が必要である。 ・高速道路を利用して村田ICから訪れる人には蔵王ジオパークの入口となるので、ここに蔵王ジオパークの看板があるとPR効果が高い。また、車の人にも見えるような案内看板等を設置すると良い。 ・展望できる盛土部分の刈払いや駐車場所の確保など、整備が必要である。 ・各方向に見える山などの案内図（展望台などによくあるもの）や、ジオの説明板を設置してはどうか。 ・季節ごとに変わる景色も見どころになるので、様々な写真を用意して活用する。 ・古地図や古い空中写真があると盆地の地形などが理解しやすく、説明しやすいのではないか。		

マップ

代表的な写真

円田盆地全景（道路脇の盛土より撮影）

円田盆地から見た蔵王連峰

展望地（道路脇の盛土）の状況

円田盆地の中央を流れる雁柄川（薮川の支流）

円田盆地ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：⑤－２

名　　称	塩沢大山（だいやま）果樹園団地	所　在　地	蔵王町大字塩沢字大山周辺
管　理　者	－	管理者連絡先	－
テ　ー　マ	【円田盆地ジオサイト】埋もれた湖の謎―蔵王火山前史を紐解く― Ｂ．蔵王火山の活動前史／Ｅ．大地の恵みⅡ―地形と土壌―／Ｉ．景勝地		
サイトの説明	蔵王町は県内一の梨の産地、蔵王の気候・風土が梨の栽培に適していることから、大正のはじめころ（約100年前）から栽培が始まり、町内の各所に梨団地がつくられた。塩沢大山果樹園団地もその一つで、昭和54年の県営農地開発事業で整備された。 山の斜面一帯に梨が植えられており、ゴールデンウィーク頃には白い花が一面に咲く美しい光景を見ることができる（「みやぎ蔵王三十六景」の一つに選定されている）。また、青麻山やその背後の蔵王連峰の山並みを一望でき、眼下に円田盆地を望むことができるため、蔵王火山の形成史や円田盆地を中心とした解説を行うのに適したロケーションとなっている。 周辺には、円田盆地の形成からその後の火山活動を物語る地層を各所で観察でき、薄木層の火砕流堆積物の中には、僅かであるが黒曜石が含まれている。ここから産出したと考えられる黒曜石で作られた石器が町内の縄文遺跡から出土し、縄文人が利用していたことが分かっている。		
ジオ要素	・果樹園脇の道路から、円田盆地や松川河岸段丘が観察できる。蔵王火山や青麻山も遠望でき、蔵王ジオパークの全体説明の場所としても利用できる。 ・新第三紀の地層（海～陸）を観察し、蔵王火山形成前の大地の成り立ちを学ぶ。 ・一帯は第三紀の火砕流堆積物の薄木層が厚く堆積している。薄木層の中に少量ながら黒曜石が含まれ、縄文人が石器の材料として利用していた。 ・塩沢大露頭（Loc.1）に見える主な地層は上層から蔵王-川崎スコリア層、大山火山砕屑物あるいは土橋火山灰、新第三紀の薄木層、砂礫からなる水成堆積層と考えられる。 ・小山田峠付近の露頭（Loc.3）では薄木層中に含まれる黒曜石を間近に観察できる（上部を不整合に覆う地層は大山火山砕屑物あるいは土橋火山灰か）。 ・小山田峠付近の道沿いに見られる小露頭（Loc.4）では蔵王-川崎スコリア層を間近に観察でき、給源の蔵王火山も望むことができる。		
話すポイント	◆地形 蔵王火山や青麻山、円田盆地や河岸段丘などが見渡せるので、蔵王ジオパーク全体の地形の成り立ちを説明する。 青麻山北側の谷から流れ出た松川が、青麻山北東～東側に土砂を堆積させて段丘地形を発達させた。 大きな川のない円田盆地では緩やかに沖積作用が進行し、盆底面に肥沃な耕土を形成した。 露頭での観察により、クロスラミナや河川の侵食の痕跡など、砕屑物（礫・砂・泥等）の運搬過程について学習できる。 ※クロスラミナ：河川の堆積に特徴的な地層の縞模様。上下の葉理（ラミナ）が平行でなく，互いに斜交する現象。堆積物を運搬する風や水流の強さや方向がしばしば変化したために生じる。 ◆梨の栽培 蔵王町の梨栽培は大正の始め頃（約百年前）に始まり、気候風土が適していたことから県内一の生産を誇るようになった。		
注意すべき点	・駐車スペースが無いので状況を考えて路上駐車となる。農作業の支障にならないよう注意する。 ・バスで来た場合、カーブが多いので停車スペースも確認が必要。 ・露頭を観察する場合は、地権者の立入許可等が必要。		
施設、案内板等の整備状況	・「みやぎ蔵王三十六景」の看板が設置されている。 ・駐車場なし		
疑　問　点			
提　　案	・梨狩り体験とあわせて、目に入る景色についてジオの解説を加えると良いのではないか。 ・露頭は比較的大きく小学校でも観察会を実施しているので、簡単にスケッチしてもらってから、堆積構造の成因や見え方について説明をすると良いのではないか（難しくなりすぎないように注意し、「模様で上下がわかる」程度の説明をする）。 ・周辺の露頭も確認し、見学者の立ち入りが可能であれば黒曜石の採取体験も楽しい（要保全計画）。 ・各方向に見える山などの案内図（展望台などによくあるもの）や、ジオの説明板を設置してはどうか。		

マップ

果樹園団地から青麻山及び蔵王を望む

代表的な写真

周辺の露頭の様子（私有地は立ち入り許可が必要）

円田盆地ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：⑤－３

名　　称	湯口清水（水神社）	所　在　地	蔵王町大字平沢字湯口２９
管　理　者	－	管理者連絡先	－
テ　ー　マ	【円田盆地ジオサイト】埋もれた湖の謎―蔵王火山前史を紐解く― Ａ．蔵王火山の活動史／Ｄ．大地の恵みＩ―温泉・水・鉱物―		
サイトの説明	周辺に多数ある湧水の一つで、今も地域の飲用水に利用される清水が湧き出している。しかし、この地の地名は「湯口」であり、なぜ、冷たい湧水の湧くこの地が湯口と呼ばれていたのであろうか。 この地ではかつて湯が湧き出しており、元和９年（1623年）に起こった蔵王火山の噴火（寛永の大噴火）を境に清水に変わったと伝えられている。元々、干ばつによる水不足に悩まされてきた地域住民は、田に引く水に困ることが無くなったことに感謝し、水神社（すいじんじゃ）を建立したといわれている。 東日本大震災による断水時にも、各地区の湧水が生活用水として利用されるなど、地域を支える水として大切に守られている。 また、周辺にもいくつかの湧水が知られる。「一本杉の湧水」は近年の道路工事で新たに湧出したもので、一帯が水に恵まれた土地であることを再確認させてくれる。 ※一本杉は天正８年（1580年）に開山した清立坊（現在の清立寺）の参道杉並木の名残と伝わる。		
ジオ要素	・蔵王の恵みである湧水のポイント、噴火や地震による水脈の変化、水神社の起源について解説する。大地が動いていることを説明しやすい。 ・お湯が湧いていたが、元和９年（1623年）の噴火（寛永の大噴火）を境に清水に変わった。 ・貴重な水資源として稲作に重用されてきた。 ・ジオ的には「湯口」⇔「清水」（温泉ではない）の意外性に着目させる説明がよい。		
話すポイント	◆寛永の大噴火 江戸時代はじめの慶長16年（1611年）には慶長三陸地震・津波が起こり、東北地方の太平洋側に大きな被害があった。この４年後には蔵王火山の活動が活発化し、以後80年間に12回の噴火が記録されている。中でも元和９年から寛永元年（1623～1624年）の活動は「寛永の大噴火」と呼ばれ、山麓の村々に火山灰などが降って大きな被害があったと記録されている。 ◆歴史・経緯 湯口清水と呼ばれるまでの経緯について説明。現在も地域住民の貴重な水源である。 ⇒噴火によって大きな被害もあったが、現在まで続く恵みも得られた。 ⇒大地は生きていて、地下水の流れも変化する。 ⇒温泉が水に変わった・・・ということはまた温泉に戻る可能性がある？ ◆地質 一本杉の湧水は、周辺地域の地下水の豊富さを説明するのに適している。 北側の鎌倉沢には鎌倉温泉があり、前九年の役（1051-1062年）にまつわる伝説が残る。		
注意すべき点	・水質調査結果は掲示されており飲用に関しては問題ないとされているが、個人の体質・体調等により健康上の問題が生じる可能性を理解していただき、あくまで自己責任での利用とする。 ・現在、水神社の湧水は蛇口でしか見ることができない。 ・道がかなり狭く、歩行者もいるので、通行の際には注意が必要である。 ・大型バスの進入はできない。 ・一本杉の湧水は量も多く立ち寄りやすいが、実際の湧水箇所からは離れている。		
施設、案内板等の整備状況	・普通車数台分の駐車場と説明看板がある。 ・説明看板には湯⇒水の解説もあり、ジオ的な内容も含んでいる。		
疑　問　点	・なぜ、お湯が水に変化したのか。水質的な変化は？ ・湯の湧いていた場所と湧水地点は同一地点なのか？ ・東日本大震災を境に湧水量に変化があったのか？		
提　　案	・湯⇒水のストーリーは変化を感じることができ良いが、人工的な蛇口からというのがもったいないので、地中から湧出する様子を見せられないか。 ・名水巡りジオツアーとして、それぞれの湧水地を回り、由来、利用方法等の説明、また、いずれの湧水もおいしいので味わってもらう方法（コーヒー、蔵王山果実水割り、ガリガリ君等）も考えられるのではないか。 ・子どもたちに水の温度やＰＨの測定、リトマス試験紙などを使った実験を体験してもらうと面白いのではないか。		

マップ

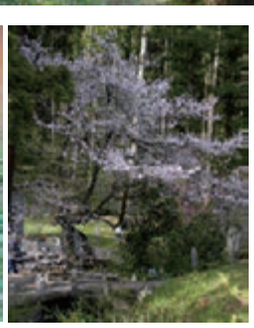
代表的な写真

湧水地点（水源地）

水汲み場（パイプで導水され蛇口になっている）

水神社と説明看板（清水と神社の由緒）

蔵王権現像



水神龍桜

一本杉

一本杉の湧水

円田盆地ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：⑤－４

名　　称	平沢弥陀の杉（だるま杉）	所　在　地	蔵王町大字平沢字丈六７８－１
管　理　者	蔵王町生涯学習課	管理者連絡先	TEL：0224-33-2328（文化財整理室） FAX：0224-33-3831
テ　ー　マ	【円田盆地ジオサイト】埋もれた湖の謎―蔵王火山前史を紐解く― Ｈ．歴史と文化／Ｊ．気候と動植物		
サイトの説明	樹高約45m、幹周約9.7m、推定樹齢850～900年という県下有数の大杉である。高さ10m付近で複数の枝幹に分かれている。根元に空洞があるほかは健全で、樹勢は今もなお盛んである。かつて「丈六阿弥陀如来坐像」を安置した阿弥陀堂の参道杉並木の名残で、阿弥陀堂の建立と同時に植えられたものと考えられている。往時は25本が並木となっていたが、阿弥陀堂の修理費用などのために江戸時代半ばから明治時代初頭までに多くが伐採され、現在の一本を残すのみとなった。 阿弥陀堂は明治時代初頭までに荒廃したが、「丈六阿弥陀如来坐像」は現在、保昌寺に安置されている。平安時代末期の作風で平泉中尊寺金堂阿弥陀如来像と類似しており、当時の東北地方を支配した奥州藤原氏によって造られたものと考えられている。 幕末から明治時代初頭には、産科医の五十嵐汶水（ぶんすい）がこの地に安産祈願のだるま講を開いた。これは、当時あまり民衆に受け入れられていなかった西洋医学の知識を「だるま様の教え」として広めようとするものであった。汶水はこの杉を守ろうと「村役方、この大杉を永世伐らせないで下さい」と刻んだ戒石銘（かいせきめい）を建立した。その後、この杉はだるま講のご神木「だるま杉」とも呼ばれるようになり、平沢地区のシンボルとして今日まで守り続けられている。 ※「平沢弥陀の杉　附 戒石銘」として宮城県指定文化財（天然記念物）に指定されている。 ※「丈六阿弥陀如来坐像」（保昌寺）は宮城県指定文化財（美術工芸品）に指定されている。		
ジオ要素	・推定樹齢900年にもなる県内最大級の大杉であり、歴史的背景と周辺地域の環境変化との関係についても解説する（火山活動や水害と人びとの暮らしに絡める）。 ・古いものを処分（伐採）してきた歴史と、それを守ろうと努力した人達の歴史について解説。 ⇒ジオパークの概念（保全・活用）と併せて解説する。 ・奥州藤原氏、五十嵐汶水、だるま講、戒石銘などはジオとは直接には結びつきにくい。東北地方を支配した奥州藤原氏が交通の要衝としてこの地を重視したと考えられること、その名残が地域のシンボルとなり、新しい信仰や文化を生み出したことを解説する。		
話すポイント	◆県下随一の大杉 推定樹齢900年とされる県下稀に見る巨木である（男性7人が両手を広げて一周囲むことができた）。里でこのような大杉が残されているのは珍しく、長い間この場所が安定した環境にあったことが分かる。江戸時代中期までは25本の並木であったが、阿弥陀堂の再建費用などのために順次伐採され、最後の一本が五十嵐汶水をはじめ地域の人びとに守られて現在に至る。 ◆歴史（奥州藤原氏とのかかわり） 「丈六阿弥陀如来坐像」を安置した阿弥陀堂の参道杉並木の名残で、平安時代末期と考えられる阿弥陀堂の建立と同時に植えられたと推定される。歴史背景として奥州藤原氏との関係にも触れ、人文地理的な重要性を説明する（阿弥陀堂の建立＝奥州藤原氏の縁者が平沢周辺を領有？＝当時この地が平泉にとっての軍事・交通の要衝として重視されていたと推測できる）。 ◆丈六阿弥陀如来坐像 「丈六阿弥陀如来坐像」を安置した阿弥陀堂は明治時代初頭に荒廃し、現在は保昌寺に安置されている。「丈六」とは像が直立した時に「一丈六尺（4.8m）」となるように造られているという意味（この大きさの仏像が「丈六仏」、これより大きなものが「大仏」である）。阿弥陀堂のあった弥陀の杉周辺には現在も「丈六」の地名が残っている。 ◆だるま講 五十嵐汶水が産科医として得た西洋医学の知識を「だるま様の教え」として地域の人々に伝えた「だるま講」について解説。地域のシンボルだった「だるま杉（平沢弥陀の杉）」周辺を拠点として活動し、「戒石銘」のほか多くの石造物などを残した。		
注意すべき点	・やや狭い道を入っていくので、大型バスの進入はできない。 ・周辺は住宅地で、すぐ隣に民家があるので迷惑とならないように注意する。 ・通常の見学時には根元周辺を踏みつけないように注意する。 （地面が硬くなると根の成長が阻害され、古木の樹勢の衰退を招く恐れがあるため） ・自生の杉ではなく人の手によって植えられ、守られてきたものである。		
施設、案内板等の整備状況	・周辺に案内看板が複数ある。 ・普通車数台分の駐車スペース、説明看板（平沢弥陀の杉、だるま講、だるま講石造物群）あり。		
疑　問　点	・巨大な樹木が長年そこに立っていられるということは、地盤の堅さ、周囲から強風の影響を受けにくい等の地理的な好条件が重なったのではないか？		
提　　案	・古木の樹勢が衰退するのは根の障害からが多い。見学者が多数来るようになれば杉の保護のために根本を踏みつけられないようにする対策が必要ではないか。 ・人の手で植えられたものでジオとは直接結びつきにくいが、この杉を間近に見る迫力は凄く、他のジオポイントと組み合わせて見てもらうと良いのではないか。 ・「丈六阿弥陀如来坐像」は付近の保昌寺に安置されているので、合わせて見学すると良い。 ・弥陀の杉、湯口清水とは距離も近く、徒歩であわせて見学できる。 ・五十嵐汶水の再評価も必要ではないか。 ・元和元年（1615年）に植えられたと伝わる白山神社参道の杉並木（弥陀の杉から南へ2kmの県道沿い）も移動ルートに組み込んで一緒に回ると良い。		

マップ

代表的な写真

平沢弥陀の杉（だるま杉）

平沢弥陀の杉とだるま堂の境内

「だるま講石造物群」の解説看板
（付近に「五十嵐汶水とだるま講」、「平沢弥陀の杉」の解説看板もあり）

だるま塚と「愚鈍庵」の石碑
（臨月を迎えた妊婦のお腹を象り、蓋石に「平沢のぶん水塚のお茶の花　煎じて飲めば産が軽いぞ」と刻む）

幹周りは大人７人分の太さ

樹高は約５０ｍ

戒石銘
（「遺願　村役方、この大杉を永世伐らせないで下さい」と刻み、だるま杉に対する汶水の思いを伝えている）